

2005年度 森村・川村ゼミ議事録

6月8日

司会: 藤村 百恵

記入: 元島 瑞貴

文献:

『彫刻とポストモダン』ロザリンド・クラウス

『美術館の廃墟に』ダグラス・クリンプ

発表グループ:

A 石原 小椋

B 豊島 鯨井 深井

議題

A・・・私たちはどう三次元的なもので彫刻を捉えているのか？

→普段の生活に三次元の彫刻は果たして必要か？

B・・・美術館(博物館)は、過去と現代の時間を結んでいるのか？何処まで深い
見解をもつのか？

各グループの考察

A・・・ロザリンド・クラウスは彫刻で全てを包括しているが、その意義は何であろうか。
アースアートなどの大規模なものはモニュメントとして見られてしまわれがちであり、私
たちは製作者の意図を何処まで理解出来ているのか、という疑問がある。私たちは普
段の生活に三次元の彫刻はあまり必要が無いように感じる。

B・・・一貫した表象を作り上げる“虚構”は、ユダヤ博物館からも見られるように、時間の
関係は気にせず、過去が担っていたものを、現代で共存させることを目指しているの
ではないだろうか。

議論の展開

■ 触覚を伴ったアート(ex 批判的地域主義)

→スペクタクル的なものを期待しているのではないだろうか(ワクワクやドキドキ)

→アースアートが人を引きつける要素は何か。自然そのものが引きつけ、何でもそこに
含んでしまった時、美術館から出てしまうことで距離感が生じる。

■ アースアートとユダヤ博物館は同じようなことなのか？

①建築は果たしてアートなのか

現代においては、建築家の名前が美術館となっている

しかし作者ばかりが責められるのもどうか

②雷はハプニングか？そこに一瞬の芸術の可能性を体感する

美術館の作品→永続性

アースアート→時間の中で変わっていく

→ベンヤミン 複製品による「アウラの喪失」

■ アートの生きる場所

美術館作品を400年間保管していくことは素晴らしい。アースアートは美術館に収められないから、外に出ただけであり、芸術作品が生きる場所によって変わる。

→しかしそれを残す or 残さないは誰が決めるのであろう？

■ 写真技術による作品の保管

アースアートやモナリザは時間の経過とともに朽ちていくが、それを保管していくための複製品、写真の存在。

→写真に果たして「アウラ」は無いのだろうか？アートの形がシフトしていくことも、あるのではないか。現代において写真はアートとして確立しているのではないか？

■ 彫刻という括りは一体何であろうか？

→ミニマルな純粹視覚性

それが大きくなっていったのがアースアートではないだろうか

→三次元空間で彫刻だけに収めるのは無理ではないか？それは他の領域（例えば建築）がアートとして侵食してきているからではないか？ →彫刻は<モノ>と<空間>との関係性の中に成り立っているものではないか

記入者の考察

議論の後半で挙げられていた、日常生活の中における三次元的彫刻の必要性と、美術館を飛び出したアートの可能性については、ケネス・フランプトン述べた批判的地域主義からも見る事ができる。地域的地域主義は、視覚の優位性からより触覚的な五感を伴うアートへの転換を求め、無秩序に集めたものに意味付けし、分類したことで無理やり一貫性を持たされた“虚構”を取り除こうとし、「土地を建てる」といったポストモダニズムの建築様式の新たな可能性を示した。ロザリンド・クラウスやダグラス・クリンプもまた、従来までの“箱”の中での美術館のアートにはない、ある種のスペクタクル性やハプニングを見出し、そこに複製品の大量生産によりベンヤミンが悲観した「アウラの喪失」を防ごうとしたようにも考えられる。

しかしながら疑問に思うのは、美術館の中でのアートが永続性を持っているのならば、アースアートや日常的空間における三次元的彫刻は、時間の経過とともに変化し、朽ちていくのであろうから、それを保管するための記録としての写真技術を導入したとする。では、写真技術はその全てにおいてアウラを無効化してしまうものなのであろうか。これは私が先日足を運んだ東京都写真美術コレクション展でも考えたことだが、モダニズムの時代においても写真は十分その記録としての役割を超えた新しいアートのジャンルを

確立しているようにも思う。このことから、現代のアートは“箱”に収まっているからその実体を伴っているのではなく、アースアートや写真技術は、モダニズムからポストモダニズムへの時代の変容の中で、新しいアートとしての可能性を実証しているのではないだろうか。